

平成二十五年六月十四日のNHK「日本の藝能」再放送にてこの日、坂東三津五郎丈演ずる素踊り『すつぽん』の舞臺に魅せられたり。續いては『楠公』を演ずと。

私は、この一言に驚きと感動交々來たり思はず釘付けとなれり。過ぐる七十年以上前、國民學校にての學藝會にて“櫻井の驛の別れ”を六年生の方々演ずる舞臺を思ひ出せり。戦後、國語教科書や音樂の本からも抹殺せられし『楠公』の物語。坂東三津五郎丈、舞ふにあたり一言。『この「楠公」は、前々からわたくしの舞ひたきものにてありけり』と。この言葉に坂東三津五郎丈の平生の心の在り方がそこはかとなく偲ばれ嬉しき更なり。

ここ“文語の苑”にて『文語教科書明治大正文語五十撰』公刊せられ、眞先に、落合直文『弦月旗』を繙く。この『弦月旗』の作者は落合直文にて楠公と正行の別れを歌へる『青葉茂れる櫻井の 里のわたりの夕まぐれ 木の下蔭に駒とめて 世の行く末をつくづくと 忍ぶ鎧の袖の上に 散るは涙かはた露か』の歌詞は少女時代愛唱せし忘れ得ぬ歌なり。現代の歌舞伎界にて『楠公』を前々より舞ひたき思ひ抱きをられし坂東三津五郎丈の更なるご活躍を祈るなり。